



千葉県最新の医療情報紹介

生死の境で脳を守れ！ 心肺停止蘇生後の 「脳低体温療法」



船橋市立医療センター
救命救急センター長
境田 康二 医師

命と人生を助けるため、脳を守る

近年、街中で心筋梗塞などを起こし心肺停止（心臓が止まってしまった状態）となった患者さんが、AEDなどによる救命措置を受け、心拍が再開（心臓の動きが再開）した状態で病院に運びこまれるケースが増えています。

しかし、心臓が止まっている間は脳に酸素が届いていないため、脳は大変深刻なダメージを受けています。

せっかく心臓が再び動き出しても、脳のダメージが大き過ぎると、意識が戻らないまま植物状態に陥ってしまったり、重い後遺症が残ったり、最悪の場合は脳死にいたりします。

そこで、脳のダメージの広がりを防ぐため、使われるようになった新しい治療法が「脳低体温療法」です。

冬眠状態にして、脳を休ませる

心臓が止まり、脳への酸素供給が途絶えると、脳細胞はどんどん死んでいってしまいます。

そして、再び心臓が動き出した時には、心臓が止まっていた時間が長ければ長いほど、高い熱が出ます。

39度〜40度といった高い熱が出ると、その高熱によって脳細胞はさらに大きなダメージを受けます。

そこで、体を冷やして高熱の発生を防ぎ、脳のダメージを最低限に抑えるという治療法が脳低体温療法です。

具体的には、専用の水冷式ブランケットで患者の全身を冷やし、34度まで体温を下げます。

一時的に冬眠のような状態にすることで、脳を休ませてあげるわけです。

そして、患者さんの状態によって24時間、もしくは48時間低体温を維持したのち、慎重に様子を見ながら、ゆっくり温度を上げていきます。

救命の第一走者は、あなた自身！

心肺停止に陥った人が、社会復帰できる可能性を広げた脳低体温療法。

しかし、画期的な治療も、心臓の動きが再開していなければ、役立てることはできません。

以前なら、突然死で終わったかもしれない命が、医療技術や救命措置の進化により、一命をとりとめ、社会復帰できる人もいる時代となりました。

それを実現する強力な武器の一つが「脳低体温療法」です。

救命救急の現場で威力を発揮しているこの治療法について、船橋市立医療センターの境田医師に伺いました。

救命で肝心なのは、なんといっても、周囲の人が一刻も早く心臓マッサージを行い、AEDを使うことです。

「AEDを使って悪化させたらいけないから使えない」という人がよくいますが、本当にいけないのは、AEDがあるのに使わないことです。

AEDは、心臓の動きを元に戻す『治療器具』であると同時に、電気ショックが必要かどうかを調べてくれる『診断器具』でもあります。

スイッチさえ押せば、音声で、今、何をすべきかわかりやすく教えてくれるため、必要のない電気ショックで害を及ぼすなどの心配は一切ありません。

いざ周囲で誰かが倒れた時、その命を救えるか否かは、その場に居合わせたあなた自身！

迷うことなくAEDを使い、救命救急の第一走者となって、脳低体温療法まで命のボタンをつないでいただきたいと心から願います。

※心肺停止蘇生後の患者さんに対する脳低体温療法は、日本でも2006年に保険適用となり、2010年からは心肺蘇生法のガイドラインで推奨され、世界標準の治療法となりました。
どこの病院でも行える治療ではありませんが、救命救急センターであれば、今はどこでも行っています。

Chain of survival「救命の連鎖」

心肺停止に陥った人を助けるためには、5つの重要な輪があり、その全てが鎖のようにつながって、はじめて救命が可能であることを示しています。

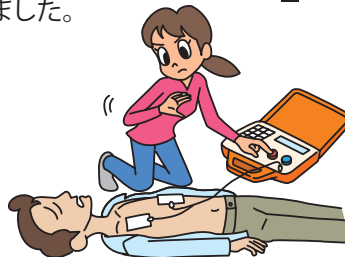
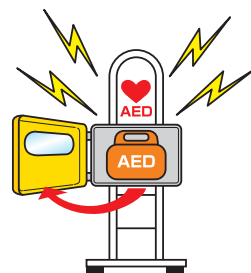
- 1つ目の輪 … 「迅速な通報」
- 2つ目の輪 … 「迅速な心肺蘇生法」
- 3つ目の輪 … 「迅速なAEDの使用」
- 4つ目の輪 … 「迅速な二次救命処置」
- 5つ目の輪 … 「心停止後のケア」



この輪は、以前は4つの輪でしたが、社会復帰のために不可欠として、最近、脳低体温療法を含む「心停止後のケア」が、5つ目の輪として加えられました。

AED (自動体外式除細動器) とは？

正常に拍動できなくなった心停止状態の心臓に対して、電気ショックを行い、心臓を正常なリズムに戻すための医療機器。2004年より医療従事者ではない一般市民でも使用できるようになり、空港、駅、スポーツ施設、学校、公共施設、企業など、人が多く集まるところを中心に設置されるようになりました。



怖がらず、心臓マッサージ・AEDで大切な命をつないでください！

消防署や医療関係各所などで行われる講習会にも、積極的にご参加ください。